主権は、だれのものか

講師：哲学者　内　山　　節

2016 年 1 月 20 日　18：00～20：00
高知共済会館

公益財団法人　高知県自治研究センター

主権は誰のもの？

2016/1/20・高知

１．はじめに

―国民主権の確認・国民主権の限界

２．国民主権はあったのかという問い

―近代的政治制度の限界

―国家に対しては国民主権を主張しつづける

―国家も国民主権も幻想ではないのかという問い

３．根本的な意味で、主権はどこにあるのか

―主権は関係のなかにあるという視点

―たとえば地域の関係が地域の主権をつくる

―たとえば弱者との関係のなかに、この領域での主権が生まれる

―たとえば自然との関係のなかに、自然と人間が結ぶ主権が生まれる

４．近代社会の仕組みが限界をみせるなかで

―資本主義の限界、市民社会の限界、国民国家の限界

―この三つの仕組みは、人々を支えられないものになった

―そういう時代における「主権」の考察とは？

５．近代社会の瓦解と混沌の時代のはじまり

―何がおきても不思議ではない時代

―「普遍主義」の限界

６．矛盾したふたつのことを言わなければならない時代

―国家に対しては国民主権を主張する

―これからの社会のあり方として、「主権は関係のなかにある」ということを実体化させる活動をすすめる…ローカリズムの時代へ

７．まとめに代えて

―混沌の時代を乗り切る構想力を

主権は、だれのものか

2016年１月20日　18：00～20：00
高知共済会館

哲学者　内　山　　節 氏

（司会）

皆さん、こんばんは。

定刻になりましたので、ただ今から内山節先生のセミナーを始めます。

内山先生にお話しいただくのは、今回で第６回目となります。今日は、「主権は誰のものか」というテーマでありまして、内山先生が最近、雑誌等に書かれているものですが、これまでの近代社会システムが崩壊する中で、日本で起きている状況、システムの価値観の転換と混乱、あるいはカオスのような状態を今日は「主権」というそういったキーワードを取り入れていただけると勝手な期待をしております。

それでは、さっそく内山先生、よろしくお願いいたします。

……

（内山氏）

こんばんは、内山です。現在だいぶ、株価が下がって来てまして、本当におかしい時代になってきています。それは、政治から経済、全ての面において、この後に何が起きても驚かないような、これまでの世界の秩序というものが壊れてきている時代に、私たちは生きている気がする。今日は、「主権は誰のものか」というテーマですので、取りあえず、その話から進めていきます。

国民主権はあったのか

今、日本において、「国民主権」というものが現実にあると思っている人は、この部屋の中には誰もいないのではないかという気がしています。実は、「国民主権」というものが本当に成立している時があったのかという話となると、いつの時代でも、看板としてはあるのですけれども、実態としてはかなり怪しいと言える。例えば、フランスでも1789年フランス革命が起きました。フランスの歴史の中では、フランス革命というのは、国民がみんな立ちあがっている、自由と平等がある、フランスの旗印の基に古い体制を拒み通した、そういう話になっていますが、実際には、国民がみんな立ち上がってスランス革命をやったわけはなく、一部の人たちの暴走によってフランス革命は成立したと言っても構わないと言えます。

いつの時代でも、社会変革、つまり幅広い人々が立ち上がっていくような社会変革が起きたとし

ても、そういう時でさえ実は傍観者の方が多いし、また当然ながらそれに反対する人たちというのも多く生まれます。そういう状況の中で、ある種の人たちが頑張って社会変革をしていくと、それが歴史的に正当なものとして位置付けられるけれども、同時に全ての国民が立ちあがってフランス革命をやったという、そういう雰囲気になっていく。例えば、第二次大戦中、フランスは、ドイツに事実上占領され、フランス人たちはレジスタンスという形で、地下で、抵抗していった。では、実際にレジスタンスはどのくらいの人がやったのかと言うと、パリの人なんて殆どやっていない。ごくごく少数の人がやった。ほとんどの人たちは、ナチスに占領された時でさえ、占領下のパリというのは平穏を保っていて、ごくごく普通の日常生活をやっていたというのが実際です。

むしろレジスタンスというのは、農村部の人たちが決起する形で行われているから、農村部の人たちが、銃を持ってパリに出てくるということでもあって、さらに言えば、ドイツ占領下のフランスで、南部フランスというのは一般にヴィシー政権と言われますけれど、自ら、ドイツの傀儡政権を作ってそれで平穏な日々を過ごしていました。最近でこそ、少し雰囲気が変わってきましたけれども、フランスでは、ヴィシー政権に関しては、最近までほとんど禁句。つまり、それは無かったことになっている。一口にフランス人といっても、色々な人がいます。そして、私は日本人だから、フランス人たちから見ると、アジアの野蛮人に過ぎないので、話をしているとムッとさせられることもある。そういう時に、喧嘩を売ってやろうとして、「そうですね、フランスもヴィシー政権を作って、あの時代生き抜いたのですからね」とか言いますと、大体の人は、そのことを知っているのだけど、無かったことにしたいからヴィシー政権を持ちだす奴は、出ていってくれという雰囲気になってしまい、喧嘩別れになる。それが、最後の切り札になることもあります。

つまり、大多数のフランス人というのは、南部では自ら傀儡政権を作ってナチスドイツに協力したという時代を過ごした。また、直接支配された北部では、大半の人たちは平穏な日々を送り、むしろユダヤ人狩りに協力していたと言えます。戦後になると、フランス人たちは、皆レジスタンスの戦いで、最後はドゴール将軍がイギリスから攻めてくる形になって、それでフランスが解放され

た。そこで私が言いたいことは、こういう時でさえ、本当の意味で、国民が主権を意識しながら、みんなして戦っていたわけではないということです。それが逆のケースになり、選挙が行われても実際には人気投票のような選挙が行われたりする。この間の日本の選挙でもそうですけれども、小泉政権下では、郵政民営化に絞って選挙が行われ、郵政民営化によって何か良いことがあるのかという話はどこかに消えてしまって、郵政民営化に反対する人たちは、当時の言葉で言えば、抵抗勢力であるというそういうムードの中で対峙していくとか、絶えずこんな形で行われていて、つまりここに国民主権なんてものがあるのかどうかということはもう誰もが感じざるを得ない。

幻想の中での主張

実は、国民主権というのはむしろ幻想であって、歴史的に見てみてもそんなものがきちんとした形で成立したことはないと言わざるを得ないような見解を持っているということを、まずは押さえておかなければいけないと思います。だけど私たちはこの社会の中で生きているわけだから、絶えず国民主権を主張しなければいけないというもう一つの側面があって、本当のところは幻想なのだけれども、国民主権を主張する形でしか、その時の政治状況に対して対抗していくことができません。だから、その点ではこれでいいのかと、国民主権というのはちゃんと守ってもらわなければ困るということで、さらに言えば憲法問題でも、実質的な改憲の問題を政府の決定だけで勝手にやってしまうようなことは、やっちゃいけない話でしょうということを絶えず主張し続けなければいけない。

だから、今の時代というのは、矛盾した二つのことを、ある意味では平気で言わなければいけない時代であって、一つにおいては、国民主権は大事だから守らなければいけない、今の政府は、守っているのかという主張を、絶えずやっていかなければならない。もう一つは、私たちがどんな社会を作るのかという話になると、国民主権というのは本当に成立したことがあるのか、それは近代国家が持っている一つの欺瞞ではなかったかという、そういう視点もまた同時に言わないといけない。例えば今、非正規雇用の人たちが、ついに40％を越えた。これはどう考えても不当な話です。しかも、非正規雇用の中でも、学生のアルバイトとかはいいのですが、その給料で生活を送っていかなければいけない人たちが大量に非正規雇用になっている。そうすると、「きちんと雇いなさい」と、言わなければいけないということは確かだけれども、では全ての人たちをきちんとした形で雇用をすれば、全て問題が解決するのかというと実はそうではなく、今の労働の在り方でいいのかという問題がやはり付いてまわる。今、実質的にはブラック企業と言ってもいいような会社がたくさん増えている。また、仮にブラック企業ではなくて、非正規雇用をされているというケースであったとしても、今の働き方とかそういうことに関してもう限界を感じている人たちがいっぱいいる。本当にこんな働き方をしていて一生終わっていいのかなと思ってしまう。そうすると、私たちが働くというのはどういうことなのかとか、どういう働き方をこれから作っていかなければいけないのとか、そういうことに対してやっぱり発言していかなければいけない。実際、今、若い人たちほど、この問題に突き当たっており、本当にやりがいのある仕事の仕方がしたいと思っている若い人がたくさんいます。だから正規雇用で雇われても数年の内に辞めたりするし、「そんな不安定なことをやって大丈夫ですか」と言いたくなるようなことを一生懸命やっている人がたくさんいる。

矛盾したことを言わなければならない時代

私は、紹介されたように群馬県の上野村という、半分住民と言ってもいいようなところにいます。上野村で言うと、村民が今、1,300人ぐらい。その内の250人が新しく移住してきたＩターンと言われる人たち。実は、村の中でもＩターンというのをどういう概念にするのかで迷っていまして、上野村の統計でＩターン者と言っているのは、上

野村出身ではないけれども、平成に入ってから村に移ってきた人をＩターンと呼んでいます。その前から来ている人、つまりＩターンと言われる前からも来ている人もいるわけですが、その人たちはＩターンとはカウントされていません。さらに言えば、結婚をして、遠くから嫁いで来た人たちはＩターンにならないわけです。そうすると、Ｉターンとは一体なんだろうかと思うわけです。平成元年から、Ｉターン統計になっているので、平成元年に入った人は、もう27年間いるわけです。その中には、例えば東京で仕事をし、定年後に村に最近帰って来たという人たちもいるわけで、その人と27年間上野村にいる人たち、どっちがＩターンなのかよく分からないというのが実態なのではないでしょうか。

ですから統計とは不思議なもので、よくＩターンとか言うのだけど、上野村のようにＩターン人口が多い村になってきますと、Ｉターンの概念を村の中では議論をしている状況ではあります。ただ、今はどういうふうに概念化するかは別にして、人口で言えば20％の人がＩターン者ということになる。その人たちは上野村に来て収入が増えた人は１人もいないわけで、当然ながら、収入が激減した人が圧倒的に多い。村の中では、山の仕事している人もいるし、畑で仕事している人もいる。また役場や農協など、いろんな所にいます。そして、（収入は減っても）悪くない気持ちで暮らしている。結局そこにある、働き方、暮らし方を探して上野村に来ているわけです。そういう人たちが今非常に多くなっています。都市部においても、ソーシャルビジネスというようなものを、いろんな形で作り始めている人たちがたくさんいたりする。苦戦しながらも、いろんな形があって、だから社会の中で、働きがいがあり役割があるような仕事をしたいと思って、仕事のあり方を一生懸命模索している人たちがたくさんいる。そういうことの中にこれからの働き方の可能性が見えてくるわけです。だから必ずしも大きなところに雇われればいいという、そういう問題ではないのです。そうすると、私たちは矛盾したことを二つ言わなければいけません。一つは非正規雇用の問題はおかしいということ。きちんと雇うのが基本です。もし非正規雇用にするのであれば、きちんとした賃金を払ったうえで雇わないといけない。それを、主張し続けていかないと、低賃金労働者の人たちがますますたくさん増えてしまいます。

だけど、そのことを主張しながらもう一方において、今のようなシステムの中で安定した雇用が見つかればそれでいいということではない。ここに矛盾したことを言わざるを得ない時代です。結

局なぜそうなるかと言うと、社会が今までの仕組みで成立しなくなっている。すると、いろいろな不当なことが起きてくる。その不当なことに対しては、今のままでは社会が持たなくなってきている以上は、これからの社会はどうあったらいいのかという視点に立った発言をしていかなければなりません。例えば国民主権は本当に成立したのだろうかとか、今の働き方で良いのだろうかだとか、そういうことを言い続けなければいけない。そういう点で矛盾したことを言わなければいけないような時代です。私たちは、そういうところにまで立ち至っているのだと思わなければいけないという時期がきています。

ある関係の中でしか成立しない主権

主権という言葉を使うなら、僕自身は、国家を基盤とした主権なんてものは成立し得ないと思っています。根本的な意味においてですけど。そうではなくて主権というものは、ある関係の中でしか成立しない。どういうことかと言いますと、例えば、上野村の主権というものは当然あるわけで、上野村はこうありたいというのもあれば、国に惑わされることなく、自分たちの地域社会をきちんと作っていきたいという思いがある。上野村というのは１年間ぐらいの間にいろんなことをやっておりまして、よその地域から見ると「上野村は割にしっかりしているね」と言われる感じにはなってきています。

上野村は、歴史的に、中央権力からあんまり相手にされてきたことがない村なのです。というのは群馬県の山奥で、村の中に平坦地がほとんどありませんので、水田がない。水田がないということは一番大事な産業がないと言ってもいいし、領主からすれば年貢がないと言っていい。その結果、縄文時代から戦国時代の終わりまで、領主が居ないという村だったのです。はっきり言うと誰も欲しくない村。自分たちで自治をする村という歴史をたどることになったわけです。ただ、江戸時代に入りますと、村の中に街道が通るということで、街道を守ると言って天領化された。けれども、年貢は木材ということになっていた。上野村には、神流川（かんながわ）という利根川の支流があります。実は、僕はこの川に惹かれて釣りに行き、ここに住もうかなと思ったのですが、とても良い川なのですけれども、あんまり水量が無い。ですから材木を運ぶ手段がない。神流川ですと筏（いかだ）が流せる川ではないので、昔ですと木材を大量輸送するというと筏に組んで、四万十川なんかその代表ですが、木を流して運ぶ、そういうことができる川ではないということなので、実は、年貢は木材と言いながらその木材を運べない。結局どうなったかと言うと年貢は免除というそういう形になっていた。幕府の方もその程度しか取るものがありませんから、それをガンガン取り立てるよりは、むしろ村民と良好な関係を結んで街道警備の方で協力してもらった方がいいという、まあそんな感じで江戸時代を過ごすことになった。だから一応、天領でもあるのだけれども、領主様が居るような、居ないような場所です

その後近代に入っても、結局、国から見てもどうでもいい場所っていうのに近いわけです。上野村の人が言うには、戦後、日本の農政も村を素通り、日本の農政の最初の要というのは、やっぱり米だったわけで、そうすると減反政策も何も関係ないし、食料増産も関係ない。その後、産地化していくという動きが出てきて果樹栽培だとか特定の野菜の栽培を行うなどの動きがあるにはあった。でもこれがまた何の関係もなくて、いいかえると、それだけの農地がないということ。ですから産地化しようにも産地化できるだけの場所がないという村でもあるし、それから規模拡大とか機械化とか言っても、機械が入るような農地がない。それで、僕も村にトラクターが来た時には本当にびっくりしました。現在、僕の集落ではトラクターを持っている家が２軒あるのみで、僕は手押しの耕運機を使っている。これは僕の集落の唯一の機械です。他の人たちは全て、手と足の力で農業をやっている。僕だけ機械。僕の方だって手と足がいいのですけれど、居たり居なかったりするので、時々まともにやらなければいけなくなったりするので、最新鋭の機械化をしているということです。

だから、日本の農政というのは、上野村には全

く関係がない。国も関係がないけれども、私たちも関係がない。まあ集落営農とかいうことで、最近では、若干お金が入っていますけども、せいぜいその程度なのです。また、森林は村の95％ですが、こちらは山が急峻で、通常の林業をする場所としては、あまり適していません。下手に林道なんか作ると大変だし、それがかえって山を崩す原因にもなったりする。ですから林業に適した場所として挙げられていたりもするのですが、そこら中に林道・作業道を作ればいいというけれども、実際にはそういった場所でもない。結果として、戦後の林政も関係ないわけで、山は有るけれど自分たちで使い方を考えるしかない。したがっていろんな産業の面からも、国の方からあまり相手にされない場所であり続けてきています。逆に、「自分たちの村は自分たちで作っていく」という意識が強くて、ここは上野村の主権の場所であるという気持ちが強い。現在は森林を使って上手に生きていかないと、上野村が持続するという可能性がありませんから、どうやって森林を使っていくかという方に力を入れています。現在、山で働いている人は25人ぐらいいるのですけども、切った木は、ほとんど間伐材になります。もともと、上野村は、天然林の方が圧倒的に多くて、森林の７割が天然もの。さらに人工林も村外の大地主が3,000ha 持っていて、村内の人の所有でいえば10％ぐらいしか人工林がないという場所でもあります。

ですので、天然林も、間伐する。そこから出てきた木は全量、森林組合の製材工場に持って行って、針葉樹系の間伐材は、柱、板、あるいは製材となり、広葉樹系の木については、良い木は、上野村では木工業があるので、お椀などの小さい物から大型の家具まで全部作る材料になります。また、いずれにも使えない部分の端材（はざい）は、その後、木質性ペレットの製造プラントに運んで、ペレット化していきます。出来たペレットは、村にある４つ温泉の加熱のボイラーに使います。後は、村の中で若干フレームの中で暖房を入れながらやる農業をやっている人たちが若干います。その人たちの温室用の熱源としたり、村中の暖房としてペレットストーブ化しています。徐々に進めているという段階です。

大きい建物、たとえば村の学校とか役場とかは全部、暖房がペレット化されてまして、一般の民家に普及を図っています。高齢の一人暮らしの方に「ペレットストーブを買ってください」と言うのは大変なんです。安くても30万円ぐらいはかかりますから。そこで村が90％補助する形で、村がリースをして、それで何年か使ったら個人にあげるという形にしています。非常に安い。そういう形をとって、無理なく使ってもらおうという仕組みです。さらに去年の４月から、ペレット発電が始まって発電を開始しています。最終的には、小水力と組み合わせて地域電力100％にもっていこうという形でやっています。あんまりうれしくはないのですけど、村内には、国交省が造った砂防ダムがいくつかあります。砂防ダムとは、上から水を落として下で水を受けてタービンを回す。一応、村の水量試算があります。砂防ダムを４つ使うと、村の電気は完全に自給できるということで、ずっと交渉しているのですけども、今のところ国交省からはゼロ回答です。諦めずにやっています。今は「ちょっと検討しようかな」くらいの雲行きになってきていますが、最初はけんもほろろでした。「砂防ダムは、砂防のために使うのであって発電用ではない」と言われてきた。とにかく落ちてくる水を使わしてくれと言っているだけなのだ

けれども、諦めないでこれからもがんばろうと思っています。

そんな形で、森林を使っていると、さっき言ったように木材自体は無尽蔵に近いくらいあります。土佐嶺北の方でやっているような、小型集材林を上手く使えないかなどの研究も行っています。今のところは、出せる材が9,000㎥ぐらいだと見ています。やはり持続可能な形で間伐中心にしてこれからも出していくということになってくると、大体9,000㎥ぐらいになって、そのうちペレットに使えるのが大体5,000㎥ぐらいです。ですから、その範囲でペレットを利用する形でやっている最中です。このことも、村の主権作りにとって非常に重要なわけです。さらにペレット化しようとして運んだ物を一度はチップ化し、ペレットにつぐ上手い取引、いっぺん、チップにするのですが、そのチップを使ったものに村の畜産があります。村ではイノブタを飼っています。実はイノブタの飼育を始めたのは上野村が日本で最初です。ずっと育てているのですけども、水田がありませんから藁(わら)が無い。だからイノブタの宿舎の敷き藁の代わりにチップを使う。そうすると、糞尿と一緒に回収されていくので、これが村の堆肥工場で堆肥化されていく。これは、村外にも多少は売っていますけども、基本的には、あまり売る気がないのです。村の農地還元です。

あと、村の農業で一番の主力は、キノコの生産です。シイタケが中心です。シイタケ生産で4億円ぐらい収入があって、1,300人の村にしては大事な産業です。そのオガクズですが、これもペレット工場で作って回しています。コナラなどを使いますが、実は残念なことに、今シイタケの菌床のオガクズは九州産の原木を使っています。福島原発事故の影響です。上野村は東京並みの放射線量なのですが、上野村では放射線量を測ります。キノコなどは濃縮するという問題があって、上野村は自主規制で20ベクレルとしています。国は100ベクレルですが上野村は20ベクレル。村の信用を維持するためです。国の基準では、不安を持つ人がたくさんいますので、村としては限界まで下げている。そのために、上野村の原木は使えないということも起きています。ただし、考え方としては、村から出てきたコナラを使ってシイタケを栽培したりするという形を考えています。

後は、上野村は、年間推定21万人が来ている観光地でもあります。ただ、上野村というのは、特に言えば何にも無い村なので、元々は観光地ではなかった。今では、「昔らしい村がある」ということで人が、やって来る観光地なのです。「普通の観光地はもういい」と思っているような人たち

が、上野村の自然を見に来たり、何となく村で滞在して、ここに来ればほっとするという、そういう観光地です。今はそういうことを求める人が21万もいますから、随分世の中変わってきたなという感じがします。だんだんと増えてきています。それは、やはり良好な形で森林が維持され、森林を使って、ペレットを作ったり、発電したり、それで地域電力を作ったりしながら循環できるような地域社会を作っており、これ自体が観光資源でもあるからだと思います。そのことに惹かれて来ている人たちがたくさんいます。ですから去年は、ペレット関係の視察だけでも、ものすごい数があり、ついに上野村のペレット発電の視察が有料になってしまいました。つまり、役場の職員が、案内係で駆り出され本来の仕事ができないぐらいになってしまったわけです。地域貢献には大きな力ですから、これを産業化しようというわけです。来られた方にわずかながらご負担をお願いする仕組みになってしまったのです。

これら全部含めて観光地なのです。だから、上野村にある様々な資源も、実は上野村の主権なのです。だけど、その主権というのは一連では、村民が作っているものでもあるし、村民の支持を受けて、逆に商売をやっていることでもあるわけですけれども、しかし、その主権を作っている一番大きなものというのは、上野村における人々の関係です。つまり、上野村には、歴史的にずうっと自然との関係があるし、そして山奥の言わば閉ざされた村みたいな感じになっていて、最近は大きいトンネルもついたので、ようやく閉じられたという感じではなくなったんですけど、それまでは、本当に、大雨が降ると村から出られなくなっちゃったりすることがよくある村だったのです。そういう村であるが故に持っている共同体的な雰囲気とか、それから伝統文化とか、それから年中行事とか祭りとか、そういうものが普通に行われていくということを通しながら、私たちの村はどういうふうにあったらいいのかを何となくみんなは考えている。だから、特にみんなして真面目に考えているわけではありませんが、村の自然との関係とか、人間同士の関係とか、地域文化とかの関係とか、そういういろんな関係が、この村はどうあったらいいかを何となく教えている。それに沿って村政が引かれている。現代社会においては、現代的な生かし方も知らなければいけないので、ペレット作ろうとか発電しようとか、最終的にはちょっと砂防ダムを利用させてよとか、そんなことも考えながらやっています。だから、村長が主権を持っているわけでもないし、役場の職員が主権を持っているわけでもない。村民が主権を持っているというわけでもない。むしろそうではなくて、村における関係なのです。上野村はどうあったらいいかを教えている、その関係こそが主権を作っていると言ってもいい。その関係の中に村民もいるし、役場の人たちもいるし、村長もいるわけですから。そういう意味では、みんなが主権者だという言い方もできる。主権というのは、どういう関係が出来てきたときに、どういう主権が生まれていくかということだと思うのです。

関係こそが主権を作る

例えば今、障がいを持っている方と共同事業所を作ったりしている人たちが、全国にたくさんいます。そこでは、障がいを持っている方と健常者との関係ができていく。その関係の中で、自分たちの共同事業所というのはどうあったらいいのかというのが見えてくる。だからここに主権というものができてくるわけです。それは、全員が主権者だという言い方もできるし、そこで作られてきている関係自体が、そのありようを決めている。つまり、関係こそが主権を作っていると言ってもいい。だから、逆に言えば主権っていうのは関係が作っていくものだと思うべきです。例えば、各家族で見ても分かるのですけども、まさに家の中の主権は、家族が主権者であるということになる。だけど、その家族が主権者だと言えるのは家族の関係がそういうものを作っていると言ってもいい。だから家族のありようなんて、例えばお子さんが生まれて間がない家は、中心にお子さんがいる。そうするとその時の両親と子どもとの関係というのは、その関係を軸にして家族のありようが決まってきます。しかし、お子さんがだんだん大きく

なってきて、ましては高校生くらいになってくれば、当然、家族の親子の関係なんていうのも変わっていくわけで、それから夫婦の関係も多少は変わっていくし、そういう関係の変容の中で、また新しい家族の主権みたいな、家族の生き方、家族の在り方が変わります。だから家の中の関係のありようは家族の主権を作っていると考えてもいい。

仕組みの中で主権はあるのか

様々な領域の中で関係が生まれその中からそれぞれの主権が作られていく。そういうふうに思えばいいのだと思うのですが、近代という社会は、そういう方向では主権を考えなかった。むしろ多くのシステムを作りあげた。それが政治で言えば国家という仕組みを作りあげている。その国家というものは国民主権の基にある。しかし、歴史を振り返ってみると、大きな仕組みの中で、本当の意味で国民主権があったと言えるかどうかというと、実に怪しいことになる。むしろ戦時中の日本が国民主権だと言ってもいいとなってしまうわけで、なぜかというと国民の大多数が八紘一宇とか、大東亜共栄圏と言って戦争体制に協力していく。そうすると、1億総活躍社会みたいな形になるわけです。みんなして戦争体制を支えて作ったわけです。これは国民主権ではないですか、という話にもなりかねない。むしろ、戦後、特に高度成長を経た現在、人気投票的な選挙となってしまったり、その選挙で当選した政治家たちは、選挙公約になかったようなことを暴走してやってしまったりするわけです。しかし、こういうような姿は、実は日本だけの問題ではなくて、どこの国でも起きているわけで、一体国民主権とは何なのだ、と考えてしまいます。だから国民主権自体が、実は主権というものが国家のシステムの中で本当は成立しておらず、むしろ主権というのは、結びあう中に発生していくものであって、結びあう中で、共同主権のような形で発生していくものだと言える。であるなら、そういうことを軸にした社会を、本当は作っていかなければいけないのだけれど、近代では、そういう時代を迎えなかった。むしろ非常に大きな仕組みに、みんなを統合していくような社会を作り、だから主権が有るようなないような社会ができてしまったという気がします。

パリ・コミューンの中心地、ベルヴィル地区

35年ぐらい前なのですけど、僕はずっと日本の比較地としてフランスを使ってきたということもあるのですが、１年に１回フランスに行きます。ただ、実際には社会学系ではないので、いわゆる調査とかは、あまりやったことがなくて、実際に行って、何をやっているかというと、ほとんど観光で、何となく向こうの様子を見ているだけ。パリに行きますが、必ず１回は行く場所があります。ベルヴィル地区と言ってパリの下町みたいな所です。なぜそこに行くかというと、19世紀の後半、パリ・コミューンっていうのが起きたのですが、マルクスによると、世界で最初の社会主義革命と書かれています。確か２月に蜂起して、それで地域評議会みたいなものを作って、労働者たちがパリを統治した。しかし、いっぺん逃げたフランス政府が、当時ロシアに支援されながら反撃してきて、５月に結局コミューン軍は全滅したんですが、それでも３ヶ月間、労働者たちが自治権力で統治したらしい。その一番の中心であったのがベルヴィル地区です。

ここは、もともと貧しい労働者の町です。初めて行った頃には、「地震の無い国はいいなあ」と思ったくらい、バラック建ての３階建が多い。アパートがつながってまして、もし日本のように地震の多い国だったら、すぐ崩壊すると感じるぐらいの、いかにも貧乏くさい感じの町です。次に行ったときは、フランスの貧しい労働者の町という感じではなくなってきていて、アラブ人の町に変わっていました。アラブから来た外国人労働者たちがそこに住みついていて、パリの人に言わせると、「あの地区は危険だから行かない方がいい」という言われ方をしました。ただ、実際には全く危険な場所ではなくて、むしろパリの中で一番危険なのは、観光客が多い場所です。そちらの方が、

泥棒が集まってきます。「むしろスリに気をつけなさいね」ということになります。ベルヴィルの方は別に危険でも何でもなくて、むしろ僕はその雰囲気が気に入って、毎年、ベルヴィルの町でお茶を飲んだりしてました。

パリにしても、便利だけではありませんが、フランスっていうのは伝統的に農産物の小売りというか、市場ができます。例えば、日曜日の午前中であれば、大通りを閉鎖してトラックが並んでいて、持ってきた農産物を売る。最近ですと、スーパーマーケットに近いようなことになっています。今でもパリでは、曜日を変えて、街の色々な所で市場をやっています。大体、朝から始めて昼には終わるのですが、昼頃になると市の売店の人たちが一斉に荷物をトラック何かに積み込んで掃除をして帰っていく。ベルヴィル地区でも同じことが行われています。ただ、キャベツなんかだと外側に食べないような葉がありますが、やっぱり日本と同じで、売るときには外の葉を剥がして、内側の柔らかい所を売っていく。当然キャベツの外側の葉がたくさん残る。他にも、葉っぱを切ったものもあり、まだ食べようと思えば食べられるのだけど、ゴミになっていくものもたくさんあります。ベルヴィルなどでは、出てきた野菜くずみたいなものは、まだ料理すれば何とかなるというものと、全く何ともならないものを、きちんと分けて段ボールに入れ、こちらは食べられる野菜、こちらは食べられない野菜くずみたいなものをきちんと売店の人も分ける。そして終わって掃除が始まる頃になると、一番貧しい人々がやってきて、食べられる箱の中から自分の欲しい物をもらって帰っていく。まあ一種の相互扶助なのですが、そんなこともごく普通に行われていく町でもあったりするわけです。ですから、危険な町というよりも、むしろとってもいい感じの町です。

困ったことといえば、よく「日本人だ」と言って子どもたちが「わぁー」っと、数人で走ってきて「空手を教えてくれ」と言われます。「日本人だからと言ってみんな空手ができるわけじゃないんだ」と言っても「うそだ」とか言ったりする。「映画で見たけれど、日本人はみんな空手ができる」とか、「君の見た日本人というのは、日本人じゃない、香港人だ」とか言うのですが、その辺が混乱しています。そんなことやっていると、大人がやってきて「こらこらその人を困らしちゃいけませんよ」なんて言ってくれたりします。そんな雰囲気の町です。ただ、そこは今はアラブ人街ではありません。一番多いのは中国人です。どうしてそうなったのかと言うと、政府は、国民に対して健康的な生活を保障する義務があると称して、その地区の再開発をしてしまった。それで地震が来たら、壊れそうな建物を片っ端からぶち壊してしまった。その壊している最中、見ていたのですけど、日本だと、ここまではできないなという感じでした。どういうことかと言うと、その人達は、壊されても行く所がないわけです。ですから、そこにまだ住んでいるにもかかわらず、人が住んでいるのを、片っ端から重機で壊していく。半分ぐらい壊れたところで、これ以上住むと危険なのでしょうがないから出て行くんだけれども、それに対して、フランス人たちで抗議の声を上げる人はほとんどいない。まあアナキスト系の人が20人ぐらいいたでしょうか。国家の暴力反対とか言っている割には少ない。つまり全く無視された存在で、僕自身、行っても何となくぼんやり見ているくらいで何をするわけでもないのですが、壊されていって、その後には再開発されたアパート群ができていきます。一応、元に住んでいた人は、優先的に入る権利があるということなのですけども、家賃が安い所でも５倍ぐらいに跳ね上がりましたし、高い所は10倍ぐらいと言いましたから、アラブ人なんか当然、誰も住めないわけです。結局、アラブ人たちは郊外へ、町の外側の安い所を探して分散していくという形になっていきました。

その人たちが、日曜日になると、市が建つということもあるのですけど、何となく集まってきて、交流したり親交を温めたりしている。ここ最近は、日曜日になると「あ、ベルヴィル行こう」というような感じになっています。一応、追い出されてしまったといいますか、彼らが追放された後に探したアパートは、彼らの入れるようなアパートがある所というのは、フランス人の言わば貧困世帯が多い場所でして、そこはまた、経済的に不況になったりすると一番ダメージを受ける人たちの場

所なっています。そうすると、そこは、アラブ人の存在が失業者を増やしているというような国民戦線の主張が通用しやすい場所、いわば国民戦線の拠点でもあるわけです。そういう所に住むようになって、結局またその地区においていろんな迫害を受けて殺されたた人もいますし、殺されないまでも大変な生活をせざるを得ない。そういう形でアラブ人たちの世界があって、フランスの社会というのは、自由・平等・友愛みたいなものを掲げているのですが、実は民主党政権ができた最初の首相の鳩山さん、「友愛」が大好きで「友愛、友愛」と言っていましたね。まああの人は理科系の人ですし、友愛でいいのですけど、言葉の意味を厳格に言うと鳩山さんは勘違いしていると思います。

友愛とは

何を勘違いしているかと言うと、友愛という言葉は仲間社会の友愛という意味であって、だから仲間以外には友愛は通用しない。古くは、キリスト教友愛主義からきていて、クリスチャンたちが守り合うという友愛なのです。だから異教徒に対

しては、友愛はないということになる。今度は近代になってくると、フランスだったらフランス国民の友愛であって、非フランス人は友愛の対象ではないということになっています。もちろん、それはおかしいじゃないかというフランス人もいるわけで、この問題で絶えず議論されることになっていくわけです。その言葉は、発生から言うと、あくまで文化を共有する者たちの友愛という意味であって、だから古くはキリスト教を共有する人たちの友愛であるし、あるいはフランス的にもフランス的文化を共有する人たちの友愛ということ。そうすると、今では、アラブ人たちは、子どもが生まれて二世とか増えているんですけども、二世たちはフランス人でもあるわけで、だけどフランスの文化とかフランスの理念に同化しない形で、友愛の対象ではないことになってしまいます。

だから国家の制度としては、取りあえずはフランス人ですから同じ扱いですよということになるのですけど、実は、社会の扱いとしては友愛の対象ではない。その結果、絶えずいろんな所で差別されるし迫害される。また、例えばイスラム教徒のスカーフ（ヒジャーブ）を頭に巻いているあれですけど、フランスは政治と宗教を分けているため、公的な場所で宗教的な服装をするのは駄目という話になっていく。しかし、イスラム教徒からすると、別に布教して歩いているわけではないわけです。自分たちにとってはそれがとても大事なことで、だけどフランスの政治が認めないということになっているということで、そういう点では国家制度のもとでも実は迫害を受けることになるのですけど、社会的迫害がもっとひどい。

しかも、今一番の問題点というのは、イスラム系の人は、名前を見ると大体イスラム系の何処から来た人だと分かってしまうので、就職先が見つからない。それで履歴書を提出した段階で不採用にされてしまうわけです。もちろん不採用にした方の企業は「イスラム教徒だと思って不採用にしたわけじゃありません」と言っているわけですけど、たくさんの中から選考したとは思えないわけです。現実に、イスラム教徒というだけで就職先が見つからないという状況になっていて、若者たちがものすごい高失業率ということになってしま

う。そうすると、その人たちが、自分はやっぱり、人間なのだということ確認できることというのはイスラム教徒としての自覚を持つことによってしかない。

つまり自分はイスラム教徒であると宣言することによって、今は迫害を受けているかもしれないけれども、我々もちゃんとした人間であり、歴史を変えていく人間なのだということになってしまう。だから見ていると、イスラムとして初めて人間の誇りを感じたという人たちがたくさんいたりします。そういう人たちの中から、ごく少数ではありますけども、テロをする人たちも当然ながら登場してくるわけで、ここにおいて、例えばニュースなんか見てみますと、イスラムの若者たちが、フランスでも絶望的な状況に置かれていて、追いつめられてテロリストになるという報道をされるのですが、あれは全くの嘘です。追いつめられていることは確かだけれど、追いつめられているだけでではない。IS などの主張に未来の可能性を感じたといいますか、初めて我々が歴史を変革する主体になれるのだということを感じたのだと言う。もちろん、IS の主張でいいのかという問題はありますけど、イスラム教徒になることによって初めて人間として発言できるようになった。そういう人たちの中のごく一部の人たちが、今度は IS の主張に共感することによって、私たちは歴史を変革する主体になりえるのだということを言い出したわけです。だから強固なわけです。つまり、追いつめられたわけではなくて、可能性を発見した、そういう人たちが否応なく登場してきています。

欧米社会が作ってきた世界の仕組み

では、ここで、彼らが感じている世界像とは何かと言えば、特にヨーロッパですけども、欧米の人たちによって、自分たちの世界は、常に勝手なことをされてきた。かつては、植民地とされて、その結果として変な所に真っすぐ国境を引いて、こちらはイギリス、こちらはフランスなんて話になってしまって、未だに解消できない形になっている。だから本当のイスラム世界とかアラブ世界を復活させようということになってくると、植民地統治時代の線引きも含めてやり直さなければいけない。だから、例えば IS なんかの主張というのはそれなりに正当性を持っているわけです。例えば、シリアとイラクの間の国境線というのは全く無効であるし、そうではないアラブ世界を作るんだと。そういう植民地統治の結果出てきた、不正を正していこうというのは、IS 的勢力の主張によって、正当化されてしまうということに問題があるということです。

結局それはなぜかと言えば、それをやってきた欧米社会の人が、自分たちの方が非常に不当な行動を取ってきたということを、全く認めていないことに尽きるということなのです。つまり、自分たちが不当な行動をとって、未だに解消できないような後遺症をアラブ地域に残していることに対して、本当にお詫びしながら、これからの世界を考え直しましょうという発言というのは出てこないわけで、変なテロリストの話に絶えずなっていく。だけど結局、この枠組みが消えない以上、そのまさに変なテロリストに未来の可能性を感じてしまう人たちが、否応なく発生してしまうということになってしまうわけです。

そして今度は、戦後になってくると、突然イスラエルが建国されて、欧米のヨーロッパにおけるナチズムのユダヤ人迫害の後始末をあそこでやったと言っている。しかし、アラブ側からすれば、全く自分たちのことを無視した勝手なやり方だということで、イスラエルを作られたという感じに当然ながらなっていく。今度は、戦後、外国人労働者として働きに来てくれと言うから行ってみれば、先ほど述べたような扱いという状況なっていくわけです。

だから、絶えず欧米社会の都合で、自分たちの世界というのは、ずたずたにされて、その被害を受け続けてきたという気持ちが当然ながらあるわけです。例えば、フセイン政権が大量破壊兵器を隠し持っているとか言ってイラクに攻め込んだものの、兵器は無かった。だけど、結局はイラクが滅茶苦茶になったということだけははっきりしているというようなことで、結局は、こんなもので、

この世界を作り直すにはどうしたら良いのかという持って行き場のない思いが、欧米的世界を破壊しよういうことになってきているわけで、パリではISの主張が一定の正当性があるような形で伝わってしまっていたりします。

だから、僕は何度もパリに行ったからわかるんですが、もしかすると、走って来て「空手教えて」とか言ってきた子どもの中に、シリアに行っている子がいるのかもしれないなどと思うと、何とも言えないという気持ちになってしまいます。こういう形で世界が出来てしまっていることは確かです。これでは世界はもちません。つまり、テロリストがいるから持たないのではなくて、近代世界の主導力となった、欧米社会が作ってきた、世界の仕組みがある限り、どうしても混乱とか破壊とかいう言葉が通用する時代を作っていくと言わざるを得ない。

普遍主義の成立は別の普遍主義の発生を促す

その中で、何を問題にしなければいけないのかと言われ始めてきているのが、普遍主義というものが駄目だということ。世界には、普遍的な真理とか原理があって、その普遍的な真理とか原理につながって世界を作っていけば、わりと良いものができるという考え方なんですが、普遍主義の一つは、国民国家という作り方で、国民のためになる国家とかでは、人間を、国民として一人ひとりに分割して、国民を国家が一元管理するというやり方。今のマイナンバー制度みたいなのものです。一人ひとりにナンバーが振られていて、１人の個体、個人なわけです。さらには、マイナンバーは国家が一元管理する。本当に真っ当な管理なのかどうか、本当に「これいいですか？」という話も出てきます。

今の国家の在りようというのは、それまで共同体と共に生きてきた、コミュニティーと共に生きてきた人間を、個人にバラバラにして、国民として位置付けて、国家が全面管理していく、この形が国民国家という形です。だから近代になってくると、国家の形は、国民国家が普遍主義になったわけです。それが正しい形だということで、世界中が、国民国家にならなければいけないという方向になった。また、国民国家における政治制度は何かと言うと、代議制民主主義という一つの普遍主義、唯一の方法が採用されています。

近代社会の理念は、自由・平等・友愛という理念であって、これが一つの普遍主義を作っていく。この普遍原因が、世界にはあって、それが世界中で実現されていけば、良い社会ができるのだという考え方です。それが近代における一原因で、それが言わば普遍主義と言ってもいい内容なわけです。一時期には、それは力を発揮したのだけれども、実は、普遍主義の成立というのは、別の普遍主義の発生を促すものでしかなかったのです。というのは、さっき言った自由・平等・友愛とか国民国家とか、そこにおける代議制民主主義とか、そういう制度を作っていったのは西ヨーロッパ社会です。

では、西ヨーロッパで、普遍として位置付けた時に、何が発生していたのかと言うと、当時、一番はっきりしていたのは、ロシア型普遍主義、帝政ロシアの普遍主義です。ツァーリズム（czarism）と言っていた時代ですけど、そのロシア型帝政の普遍主義みたいなものが東欧諸国の一部を巻き込みながら、西側の普遍主義と対立するという構図を作ることになっていった。続いて、帝政ロシアは崩壊して、ソ連に変わっていく。そしてソ連型普遍主義が発生した。つまり社会主義という形の普遍主義で、それが東西対立の時代の形にもなるわけです。だから西ヨーロッパ型普遍主義が、世界中に広がったわけではないわけで、違う別の普遍主義を生んだと思ってもよい。

日本でも、勝手な普遍主義を主張したわけで、それは大東亜共栄圏という、欧米列強を追放して理想郷を作るという日本の主張する普遍主義です。それが東アジア地域において提起されることになる。ただ、こちらの方は、提起して10年もたたないうちに戦争に負けてしまったので、あっと言う間に消えてしまったけれども、もし勝っていれば、もうちょっと命脈を保っていたのかもしれません。

実は違う普遍主義を絶えず追っていくと、今度

は、西ヨーロッパ社会の中からナチズムという別の普遍主義が出てくるわけです。それが一時期は、ドイツだけではなくてイタリア、スペインも押さえられ、フランスだってファシズム政権成立直前まで行ってしまった。実は、これらは当時の近代のヨーロッパ普遍主義に対する変形であって、ファシズム型普遍主義が一時、力を発揮していたわけです。しかも双方が自分たちこそが普遍の真理を主張しているという、普遍主義が登場してくるわけです。

現在では、新しくイスラム普遍主義みたいなものが登場してきていて、それを独自に解釈すればISにもなる。イスラム的世界の中に、イスラムの普遍主義というのが広がってきています。さらに、今度は中国が、中国型普遍主義を主張するようになってきています。中国を軸にして世界を支配したいというような話が出てきている。

だから、絶えず普遍主義の登場というのは、別の普遍主義を生むわけです。そして普遍主義同士の対決になっていくという歴史でしかなかったのです。けれども、その中で一番長持ちしたのが西ヨーロッパ型普遍主義。その後、アメリカがその陣営に加わるような形で、欧米型になったりして、さらには戦争に負けた日本とかも含めて、いわば、世界の普遍であるかのごとく展開することになってくる。しかし今になってくると、そこに中国型普遍主義が出てきたり、イスラム型普遍主義があったり、ロシアもまた独自の普遍主義をこれから主張していくらしく、何かの普遍の原理があって、それに基づいて世界が治められるという、この発想自体がもう限界にきているのではないかという意味での普遍主義批判というのが最近ちょっと見えるようになってきたと僕自身は思っています。

だから結局、普遍主義である以上、それぞれの人たちが自分たちの普遍と考える考え方を譲らないわけです。そうすると、あくまでもフランスの場合、フランスに同化しなさいということになるわけで、同化しない人たちは、友愛の対象ではありませんというのです。そこでは、絶えず差別とか迫害があるし、そのようなことが行われてしまう。それは、例えば、今の経済でも資本主義的な市場経済のなかで、適応しないものは経済活動自体が壊されてしまう。その形で表れてくるのは、農村における農業であったり、今の日本の農業というのは、市場経済だけで成り立ってきたわけではなくて、農村で生きてきた人が農地を守ってきたわけだし、農地を守ることによって地域社会と結んできた。あるいは人々の気持ちとして先祖が作ってくれたものをむげに捨てるわけにはいかないなど、いろんな市場外的要素があって、日本の農地というのは守られてきたわけです。しかし、今進めているのは、もうそんなものはどうでもいい、それよりも国際競争力のある農業をしなさいということです。そのことがTPPなどでもそうですけれど、そういう方向に行ってしまう。結局、農村社会の中で根付いてきた農業はいらなくなり、農業という経営があればいいとなってしまう。しかし、農業をする以上、農地がなくてはならないから、その点では農村であるけれども、もはや農村社会とつながっているわけではなく、農村社会に地域社会とは関係ないような、数人で営まれる企業があったりして、それは農村とつながっているわけでもない。たまたまそこへ出来ただけ、それと同じような形で、経営力のある農業を行っていけばいいと、そういう方向に行く。すると、今度は従わない農業は、もう退場させればよいというのが、今のスタートになっています。これも一つの普遍主義なわけで、その普遍主義がいろんなことをぶち壊してしまう。現在、実際には、それ

に抵抗する人たちがたくさんいて、その人たちは、農村に根を張った農業みたいなものをやろうとしています。自分たちで直売所も造るし、販売もする。また都市の人のなかでも、農村と結びながら暮らす人たちが現れてきた。それが言わば一つの抵抗運動のような形で、国が目指している農業とは違う、農村農業の形を追求し、ローカル経済を主張している。あるいは冒頭申し上げたように、今の経済のままでいけば、これからは、ますます非正規雇用とか格差とか増えていくという方向に向かいかねない。しかし、それに抵抗する人たちが、ソーシャルビジネスを起こしたり、人によっては、自分がやらないまでも応援ぐらいはしていこうという流れがあるわけです。

今の社会を作った責任者との自覚

今、安保法制（安全保障法制）などでも、シールズという若者たちの動きがニュースになっています。昔とはデモ、声の掛け方も違う。しかし、実際には、シールズの若者以上に、昔の全共闘世代の人など、色々な世代の人が来ている。だけど、その人たちが主導権をにぎらず、むしろ若者たちにまかせていこうという感じが強くて、年配の人は発言したり、色々な集会やデモをやってきたのだから、応援するから頑張って、という感じです。

だけども、作ってしまったのはこんな社会だったわけで、しかし決して、僕が安保法制やろうとしたわけでもないし、僕が原発を推進したわけでもないけれども、私たちの世代が、色々なこともしたけれど、最終的に作ったのはこの程度の社会だということ。若者を苦しめ、原発の被災者たちを苦しめている社会を作ってしまった。そういうことを考えていくと、私たちも、実用的にはきちんと発言をしていくということであり、被害を一身に受けている世代の人たちに、これからの時代を作ってほしいと思っています。そのために可能な限りの応援はさせてほしいとも思いますし、昔のことでも、色々な話を聞きたいと言うのであれば話をするし、色々なことをするけれど、でも自分たちの責任というのもやっぱりどっかに感じていってもらいたいとも思っています。

だから、我々は一貫して正しいことを言ってきたみたいなことを言ってしまうと絶対いけないわけで、本当のことを言えば個人的には一貫して原発には反対し続ける自分ということはあるわけですが、しかし結局そういう社会を作ることはできなくて、これだけたくさんの原発を作ってしまった。これだけ大きな事故を起こしていながら、まだ再稼働しようとするような社会を作ってしまった。全員が、こういう社会を作った責任者の一人なのだという気持ちで、これからの変革に当たらないといけないのだと思います。

日本的普遍主義

実は、日本にも日本的普遍主義みたいなものがあります。ですが、もうそれがボロボロになってきていて、新しい色々な動きも起きてきています。例えば日米安保の問題。これは60年安保闘争から一貫して争点になったことの一つで、国をめぐる問題です。60年安保の時で言えば、連日のようにデモ隊が国会を取り巻いて、安保反対を主張して国との対決になっていった。今、安保問題に関連して一番大切な課題となっているのが、普天間あるいは辺野古になっています。辺野古がどうなるかによって、安保問題というのが一番影響を受けるわけで、宜野湾の市長選がどうなるか、僕も気にしています。

それだけではなく、この普天間と辺野古の問題というのは、今の沖縄というものが主張し始めている、日米安保の問題の大黒柱の部分となっています。中央での対決という構図で続いてきたものから、地方が決戦の場に変わってきている。この辺りが今の時代の大きな変化です。僕自身は、辺野古問題というのは、辺野古の周りの人が勝てると思っています。どうしてかと言えば、辺野古問題を巡る切り札をどちらが持っているかということを考えた時、国が持っている切り札というのは、あくまで金でしかない。認めてくれたら金を出すから、みたいな話。ところが、沖縄の人にとってみると、お金が切り札にならなくなってきている。

そうすると、国の切り札も切り札でなくなるということになってしまうわけです。

それに対して、では、沖縄は切り札を持っているのか。それは、「独立」という切り札を持ち始め、急速に独立論が抬頭してきています。まだまだ過半数という動きではないのだけれども、恐らく沖縄で10～20％ぐらいの独立支持者が出てくれば、完璧に政府は大慌てになるわけです。過半数までいかなくても、それだけの人が独立を支持するという話になってくると、そこで住民投票の問題も出てくるし、さらに言えば世界的な働きかけの問題も出てきます。それで、もし沖縄の決断ということになれば、日米安保条約は、沖縄では無効になってしまう。しかも万が一独立ということになると、また別の思惑で、中国が大喜びするというのは目に見えている。だから、独立というものが具体性があるかもしれず、政府は大慌てになる。今の翁長知事というのは、ご存じの通り保革合体のような人ですので、この切り札を沖縄が持ち、オール沖縄で、場合によれば独立を検討するよと言うと、政府から見ると、とんでもない展開をするようになるわけです。

だから、翁長知事がアメリカに行き、各方面と話をしたことが報道されているのだけれども、政府が一番気にしているのは何かと言うと、「間違っても自分達のことを沖縄先住民なんて言わないでくれ」ということなのです。つまり、「沖縄先住民は」という話になると、明治の琉球処分によって軍事力で併合されたということになるから、国際的な先住民保護問題が出てきて、合法的に独立可能になる。だから政治対決に止めておいてくれ、間違っても知事から、先住民として自分たちを位置付けるような発言はやらないでくれという。逆に言うと、翁長知事としては、そのことは言わないけれど、あんまり無茶をやるようなら、こっちも独立のことを言い始めるよという切り札もある。だから沖縄は全く違う展開が可能になってきています。

つまり、ここにあるのも、日米安保を軸にした日本というのは日本普遍主義なわけです。その日本普遍主義が、沖縄でほころび始めた。もし本当にほころんでしまうと、日本普遍主義自体が危機にさらされてしまう。だから国家の問題が、地方の問題となる。これは、沖縄が作った全く新しい時代といっていい。このようにいたる所で色々な普遍主義が壊れ始めています。つまり、市場経済という普遍主義も、本当に、世界がどうなるか分からないというぐらい怪しい状況にきているわけです。いずれ、市場普遍主義が終わったということを、私たちが支持せざるを得ない時代が来るのではないかと思います。

多様な主権

国民国家というものも普遍の形ではないという、それが色々な形で、これから顕著になってくるのではないか。そういう時代の中で私たちは、社会をもう一度作り直すということをしていかなければならない。すると、その時に基軸になるものと言うと、どこに戻っていくか、です。僕は、やはり主権は関係と共にある、この世界だと思っています。ですから沖縄的関係こそが沖縄の主権であると言ってもいいわけです。

だから、一時、沖縄的関係の世界の中に、米軍基地が入っていたと言ってもいい。かつては、沖縄経済自体が否応なく米軍基地への依存度を高めざるを得なかった時期がある。そうすると、気持ちとして、基地はいらないと思っていても、実体経済においては、経済的関係の中に基地が良くも悪くもあるという状況があった。だけど今、沖縄経済における基地経済のウエイトというのは５％以下であって、もう経済的関係の中に基地が必要であるということが無くなってしまった。むしろ、伝統的な沖縄が持っていたような、中継地としての沖縄、もともと、海を使った中継地というのが沖縄の役割でもあったわけですので、今は、那覇空港を使ったりするような、アジアとの物資の中継基地としての役割が大きくなってきています。

それから、観光地としての沖縄というのは、色々な役割があり、沖縄の人の、生きる関係の世界に、基地が要らなくなってきている。むしろ基地を返還してもらって、そこを自分たちの良いように再開発させてもらった方が、自分たちの関係

の世界を強くできるということでもあるわけです。沖縄の関係の世界こそが、沖縄の主権を作っているということが、だんだん見えるようになってきた。それが今の状況だと思っています。

だから、主権というのは、実は一つではなくて、例えば、沖縄主権となってくると、沖縄は色々な島もあるし、色々な地域もあり、そこに主権がある。つまり、大きくは沖縄主権なのだけれども、小さくは、ローカルな主権があると思うわけです。僕のいるような上野村ぐらいになってくると、冒頭申し上げた通り、歴史的には、あまり相手にされたことがなかった村なので、「上野村主権でいきます」という感じで主張してもいいような場所でもある。だから、色々な主権の在り方があるんだけれども、ただ、それは関係し合う世界がどこにあるのかという、家族主権みたいであってほしい。それから、子どもたち自身が、自分たちの主権というものを作ってもいいし、その主権の中に、大人たちが協力的に加わっていくということがあっても構わないし、主権というのは、一つであるというものではなくて、いろんな関係の結び目を作る多様な主権があるわけです。そういう社会のあり方みたいなものを、どう具体化していくのかというのが根本的な課題です。

そうすると、フランス的普遍主義とまとめて言うのではなく、フランスの中にもイスラム的主権の社会があるという意識です。もちろん、フランス人たちの主権の社会があってもいいし、フランスも一つではないわけで、農民社会や労働者の社会、また地域的な色々な社会があってもいいし、クリスチャンの社会があったっていい。だから、多様な主権の社会が積み上がって、私たちは全体として生きる社会を作っていく方向へと向かわないと行けないわけで、普遍主義のところで問題を出してしまうと、普遍主義同士の対決になってしまいます。しかも、普遍主義の中にいる人間たちの一部は、とんでもなく迫害されたりしてしまう。そういうことが、色々な形で、テロの時代を作ったりもするということになってしまうという気がします。

混沌の時代を乗り切る構想力を

だから、今、近代が作ってきた色々なものを、根本から取り戻さなければいけない難しい時期にきています。その一方で、例えば、アメリカの大統領選を見て、トランプさんとかいう面白いことを言う人がいます。少なくとも大統領にはならないとは思いますけど、でも、もしかしたら、なるかもしれないという勢いは意識を持っていたりするわけです。つまり、色々な主権ではなくて、まさに古いアメリカを復活させる人、その人たちは人気があるらしいという状況でもあるわけです。

僕自身は、本当に、今の時代というのは、今迄の秩序あるいはシステムが全部通用しなくなっているという、そういう混沌とした、カオスと言ってもいいよう状況になってきていると思っていまして、そういう状況というのは、何が起きても不思議ではない。だから新しく、沖縄で独立の声が上がったりしながら、どんどん新しい地域主権が発生したりするような形で社会が変わっていくという可能性もあると思います。それから、数年後には気がついたら、ファシズム的雰囲気になっているという逆の可能性もある。何でもありだという時代、10年後には、日本が加わるような形で戦争が始まる。それだって絶対無いとは言えません。だけどその前に、中国とか色々なところが内部崩壊を繰り返すというようなことが起きてくる可能性だってある。つまり何が起きても不思議ではないというのは、やっぱり変革期なのです。

だから、僕自身は、今の時代というは一面では面白くなってきたと思っているのだけど、やっぱり色々なことや危険なものも当然発生しますから、それに対する警戒もきちんとやっておかなければという、二つのことが同時に起きている、その危険な時代、でも面白い時代みたいな、両方が同時に起きているという、そんな時代を、私たちは、生きているのだなという気がしています。今、何となく思っていることを申し上げ、私の話は終わります。

（司会）

内山先生ありがとうございました。

私が、まとめ上げるつもりは全くありませんが、様々な普遍主義が壊れつつある現代で、主権は関係上の中にあるということで、「主権」そのものの定義について非常に興味深く聞かせていただきました。

今の先生の話で質問がある方は、すいません、挙手をされてお名前をおっしゃっていただいて質問をお願いしたいと思います。

（会場）

生野と申します。今日のお話を伺って、少し主権に対する概念がガラガラと崩れました。現在の、暮らしの中で、もう一度改めて、主権というものはどういうものかっていうことを、国民主権と、どうも今言われている主権の意味が少し違うのではないかという感じがしてきたので、もう一度確認という意味でお伺いしたいのですけど。

（内山氏）

ヨーロッパ世界から作られてきた近代の考え方というのは、権利と義務が１セットなのです。どのような義務を果たすと、どのような権利が与えられるかということがセットになってくるわけです。これもキリスト教社会が作った考え方が流用されたということなのです。キリスト教社会であ

れば、神の教えに従うというのが人間の義務です。それを果たす限り、神は人間に色々な権利を与えていくと考えてきたわけです。だから、近代になると、神は一応社会理論からは外すということになっていくのだけれど、権利と義務とを１セットにするという点は変わらないわけです。

だから国民の権利を主張する時には、国民の義務を果たさなければいけないということになってくる。では、国民の義務とは何か。第一位は納税の義務。これは、時代によって解釈が変わるわけです。だから、例えば戦争が始まれば、戦争をするのが国民の義務になるから、実はどのようにでも解釈できるけれども、絶えず言われることは、ある義務を果たす限り権利が与えられるということ。

すると主権も同じことであって、「主権という権利」という捉え方で、近代の理論というのは、主権を権利として捉えている。そうするとそれには義務が発生する。それは、先ほどのフランスのケースで言うと、フランス的理念とか文化とかに同化するという義務を果たさない限り権利はない。だから、国民なのに主権の無い人みたいなのが登場してしまうということになってしまいます。しかもさっき言ったように、では、どういう義務が与えられ、どういう権利が与えられるのか、ここは時代によって、都合よく解釈されてしまう。だから、もし戦争でも始まれば、戦地に行くのは国民の義務であるなんて話が出る可能性があるわけです。

だから、今迄のものは、義務と権利が1セットになり、かつ中身は結構都合よく書き消されてきたりして、そういう形で主権という言葉が使われ

ている。だから、もともと中身が空洞化し、本当の意味で実態が無いということでもあった。それに対して、私の方で言っている主権というのは、言わば共同主権なのだと言えます。だから一緒になって一つの主権ができるというか、私たちが加わって主権者になる感じです。一番分かりやすいのは家族だと言ったのは、家族としての共同主権みたいなものが、生活を一緒に営んでいるものとしてあり、加わっている主権者というのが家族全員それぞれでもあるということです。

だから上野村の主権と言った場合には、上野村の関係し合う世界の中に共同主権があって、そこに加わっている人間が主権者であるという関係。沖縄で言えば、沖縄的関係の中に沖縄的主権があって、そこに加わっている人が主権者になると言ってもいい。だから近代の主権が、義務と権利の1セットで、中身は怪しく解釈されるというものであるとするならば、僕が言っている主権というのは、言わば共同主権を確立しながら、私たちは、主権者になっているということです。そういう主権の在りかたです。

（司会）

よろしいですか。では次の方。

（会場）

グリーン市民ネットワーク高知を代表する田辺です。先生は、ちらりと原発、放射能、再稼働のことを言っていたので、主権とは違って、答える領域ではないかもしれませんが質問します。

３月中に伊方原発が再稼働しようかという状況の中で、私たちは高知県で、原発は危険であるということで活動してきたのですけど、四国内に、南海トラフの千年に一度の大地震が起こるような状況の地震、マグネチュード9.1が来た場合、高知県にも被害がある。

福島原発事故があったけれども、放射能汚染の問題は福島だけではないという状況の中で、何とか止めるというか、他の県をまたいでなのですが、危機を訴える方法はないでしょうか？　３月と言うと、あと２カ月ぐらい先の状況なのですが、そんなことを考えていたら、怖くて、怖くて、頭がおかしくなってしまうのではないかという状況の中に今生きている人間なのです。お願いします。

（内山氏）

伊方原発の訴訟の方の弁護士も結構知っていますが、残念ながら、私も、これをやれば止められるというようなものを知っているわけではありません。ただ、この原発問題は、やり続けるしかないです。やり続けながら、結局、なぜこういう大きな事故が起きているにもかかわらず、世論調査をすれば原発再稼働反対の方が多いという状況の中で、決して声を上げない人たちがいることがある。これが言わば今の日本の状況を示してもいる。なぜかと言うと、声を上げない人というのは、面倒臭いから上げないわけではなくて、今の在り方を守りたい人たちなのです。つまり今の自分の生活の在り方、消費の仕方や自分のポジションなど、

人によって色々あるでしょうけど、ともかく守りたい人たちです。守りたい人からすると、大きな変動は嫌なわけです。

それからもう一つ。いまの自分たちのポジションというのは、高齢者であっても現職で働いている人たちが多くて、そういう人たちは、結局大きなシステムの中でしか生きていないのです。だから高齢者になれば、大半の人は、年金という大きな制度のもとに生きている。それから現職であれば、市場経済という大きな仕組みの中で生きている。今の、大きな既存の仕組みの中で、自分のポジションを作っているわけで、それを壊されるのは嫌だということで、変動することが嫌なわけです。ただ、原発に賛成しているわけではないのだけれども、変動は嫌だから、原発反対から始まって社会が変動されるのは困る。だから、結局声を上げない形となる。ただ世論調査には、「再稼働には反対です」とか言えるけれども、実は、根底的にあるのは保守主義という今の自分を守りたいということに尽きる。

だから、その人たちを揺さぶっていかなければいけないわけで、その人たちも、今は揺さぶられているのです。というのは、自分の子どもたちは、違う生き方をしていたりしています。ところが、揺さぶられてきているために、逆にかたくなになっているという形です。だから、今、不思議な状況で、例えば「安保法制賛成ですか」と聞くと反対の方が多い。そして、「原発再稼働どうですか」というと反対の方が多い。そして「安倍政権支持しますか」と言うと支持率が高い。その不思議な差、なんら不思議ではないわけで、安保法制も賛成できない、原発再稼働も賛成できないと思いながらも、今の自分を守りたいという。そのためには社会変動は困るということなのです。そうすると、今の社会を守ってくれそうな政権が安倍政権なわけです。少なくてもそう見えている。GDP600兆円、今年GDPの計算法変えるようですけど、それって計算法を変えちゃえば発展しているように見せるのは簡単なのです。だけど、経済発展と共に生きてきた人たちからすれば、経済発展をしながら、自分たちを守ってくれる政権なんだと、そういうふうに見える。そこで安倍政権の支持率が依然として高いという不思議な現象が起きているのです。

そういう面をこれからもずっと揺さぶり続けなければいけないわけで、色々な形の、原発再稼働、安保法制の問題、あるいは非正規雇用の問題などの問題を含めて、僕らは社会を揺さぶり続ける活動と行動をし続けなければいけない。そういうことの中から、原発はどうなんだという声が高まっていくのだという気がします。

（司会）

今、内山先生がお話されたことは、「月刊世界」の2015年12月号に先生が書かれた記事として載っています。コピーが１部ありますので必要な方がいらっしゃいましたら渡します。

後お一人だけ、では、最後の方ということよろしくお願いします。

（会場）

どうもありがとうございました。上野村の話をされていましたが、その中で環境や林業など産業面、あるいは自然のことをお話されていたのですけれども、上野村では、文化的な面でのことについて、どうやって実現されているのでしょうか。

（内山氏）

ある意味では、たいした文化も無いわけですが、人々に聞くと、ごく普通に、昔からやっていたような祭り、年中行事、それから山の神信仰があり、福の神信仰があります。山の中には、昔から村民

たちが彫って祀った石仏が1,000体ぐらいありますので、有名な人が彫ったわけではないのですが、「何を彫ったのだろうな」というくらい、たくさんあります。そういうような一種の山岳信仰が強かったという場所です。今でも、石仏などを、できるだけ守っていこうということでもあるし、また、守りたい人たちが増えています。それは、上野村に通って来るような都市部の人たちも含めて、守って欲しいと思っているし、新たに加わる人たちもいる。ついこの間も、こちらにもあると思いますが、「どんど焼き」というのを、集落ごとにやります。上野村の全体で、どのくらいやったのかは分かりませんが、10カ所以上はやったのではないかと思います。

結構、「どんど焼き」があるから来ないかという感じで、都市部の人も来ています。来て一緒にやっているわけでもなくて、振る舞い酒を飲んでいるだけというところもあります。そういうことを通しながら交流する。実はこれも上野村の文化なのです。もともと、米が無いということは、自給自足ができないということでもあるわけですから、絶えず交流しながら村を作っていき、交流し合いながら村を作るっていう雰囲気を守っていく。これも上野村の文化です。だから何か特別な指定をするような文化は何にも無いのですけど、建物だって旧黒澤家住宅という、国の文化財がありますけど、それを除けばどこにでもあるような村の家があるだけです。

ただ逆に言うと、日々の生活の中にまで、村の文化が浸透している地域です。そのことも含めて、こちらは「とうかんや（十日夜）」という、11月10日ぐらいから子どもたちが縄を張って各家を回って、「とうかんや」の歌があるのですけど、歌を歌いながら地面をバンバン叩く。そうすると、地面の中のモグラとかいろんな物が逃げ出して翌年は豊作になるということらしい。あんまり儲かってはいけないのではないかと思うのですが、そういうのも子どもたちもずっとやっているし、それから各家の人たちも「ああ、今日はクリのあめを持って、待っている」といいます。だからこれも文化と言ってもいいし生活と言ってもいい。子どもたちが各家を回ると「ごくろうさん」と言って、少しだけ、お小遣いをくれるんです。だからこそ続いてもいいのだけど、そういうことかなと思います。

（司会）

ありがとうございました。今日は、私たちが日頃何気なくイメージしたり、使ってしまう主権という言葉ですが、改めて考え直させられるような先生のお話であった思います。長時間どうもありがとうございました。